
血朱眼

剣醒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血朱眼

【Zコード】

N1275D

【作者名】

剣醒

【あらすじ】

両親のいない一人暮らしの兄と妹。その兄妹に聞かされる話はある一族に関する話。その後の兄妹は今的生活を捨てる決意する・・・

プロローグ① 兄妹（前書き）

自分が考へてた所々に「コメティイー（？）」が入ったやつを書いてみました。つまんないですがみてくださいな

プロローグ　兄妹

暗い

寂しい

誰か

助
け
て
く
れ

「今日もいい日だな」

雲一つない空を見ながら俺は思った。最近学校がつまらなくなつてから俺はよく無断欠席や遅刻することが多くなつた。おつと、自己紹介忘れてた。俺の名前は須藤 剛^{すどう たけ}。じく普通の高校2年生。17歳になつたばかりだ。

母親や父親や兄弟などがいて、日々話ができる家族がいるのが普通なら俺の家は少々変わっているだろう。なんせ、俺の家には俺以外に妹しかいない。両親は俺が物心つかないうちに俺と妹をおいて交通事故で死んでしまった。

「お兄ちゃん . . .

今日は水曜日。俺が唯一学校に行きたくなる日だ。

「お兄ちゃん！ . . .

理由は

「ゴフツッ！ . . .

たく、何で朝からテニスのラケットで殴られなきゃいけないんだ。
飯をつくる妹がつくる最中に殴つてくるなんて。滅多にあることじゃない。そうだ、俺の妹は須藤 茜。テニス部に所属する中学2年生。ちなみにキャプテンをやつてゐるじへ、学校で一番強いやい・・・

「お兄ちゃんが悪いんだからねー。フライパンに持ってるから···」

ホワイ！？

何故料理が作れない＆作る気も起られない俺がフライパンなど持つてないといけない？

朝食を食い終り片付けを終えた妹

「あつ、遅刻しちゃう。じゃあね。いつできまーす」妹はそういって勢いよく扉をけどばす···が、

「忘れ物——！」

肝心なテニスラケットを忘れたらしい ． ． ．

「お兄ちゃんも遅刻するよーじゃあね。」

が

「じゃあそろそろこいつかな」痛む頬をさすりながら俺は鞄を持って家を出る。

プロローグ1 忙しい日（前書き）

剛の通う学校についてです。

プロローグ1 忙しい日

ふつ、風が気持ちいいぜ。とか言いながら髪を直すやつがいるが、何故そうするかが俺には分からぬ。

しかも今時そんな奴はさすがにいないだろう。

「ふつ、」の風超気持ちいい、俺の田の前にそつこつて髪を直す奴が！

俺は危険を察知して鞄で顔をかくす。

が

「なあ。須藤！ 何やつてんの？」
しまつたー顔を隠してたのにバレたー！ しかも何やつてんのー？ は
俺が言いたかつた台詞なのにー！ ！ ！

こいつは俺が苦手な五人の中に入るやつの一人。 河野秀一だ。

お前 テンション低いなあ」「

はつきりいうと君が俺の前にいなければテンション低い事はないんですけど。

俺は秀一の話をシカトをしながら教室に入る。

「ツー！」

「おいおい。相変わらずの騒ぎ様だな。朝からチョークを飛ばし会うか！？まったく・・・しかも教室にチョークの粉が充満してやがる。」

「おい、須藤が来たぞ！」その声と共にチョークを投げているやつらを睨む女子が俺の回りにあつまる。自分で言つのも何だが、俺は結構外見がよく、頭も良い。だから女子が集まるのも正直無理はない。

「須藤君おはよっ。」こんな感じの声が次々に俺に向かってくるなが、一つだけ

「私の物に近付かないで」という声が・・・

「おい、いつからお前のものになつたあ！？」「

彼女は俺が苦手な五人の一人、雛園地 雪。かなりの妄想家だ。

「だつて、3歳の時に好きだつて言つたじやない。」ホワット？

？勝手なこと言わぬでーくれないー？

「俺がお前を好きになると思うか！？しかも3歳の時とか普通におぼえてないし」

「だつて、・・・」

こんな感じで授業中も続くわけ。超悲しいよ。俺

放課後には俺はもうくたくただった。理由は雲にあったのだ。

俺の回りにいる女子達に向かつて

「そんなに私のに近付きたいなら、私を倒してみなさいよ。」

何ー！？しかも何かゲーム見たいな展開・・・次の瞬間俺は女は怖いと改めて思った。

「あらあ、雲ちゃんいいの？倒しちゃってえ」すつごい形相で雲を睨む。妹以外だよ。女が怖いと思ったのは・・・これには雲も驚いた様子。だが、もう後には戻れないらしい。

「来なさいよ。すつごい力持ってる私に勝てるわけがないでしょー！？」いやー、ここで妄想使つか？まあ仕方ないな。あいつの場合

は。

結局負けたのは雲。リンチを食らって泣いてしまったのだ。しかも「何で？何で爆発が起きないのよー」と言いながら・・・完璧に危ない・・・それで勝った女子達が俺に集まり、今まで以上に使わなきゃいけなくなつたのだ。

「はあ、疲れたー」そう言しながら教室を出た。

「ふふふ、見つけ」双眼鏡を覗きながら女が呟く。彼女がいるところは4階建てのマンションの屋上。そしてまた呟く。

「楽しみー

プロローグ2 中学（前書き）

今回は茜について書きます。兄妹共に大変です。

プロローグ2 中学

「ハア・・ハア・・・・」

私は急いで朝練に間に合つように走つて登校する。一応私はキャップ
テンだからサボることは許されない。

「ツ！？」

目の前の人を見て少々立ち止まる私。「おっはよー。あっちゃん」
声の主は如月 葵。あいりゅう あおいクラスはちがうけど同じテニス部にいる。葵ち
ゃんは副キャプテンをやつていて腕もほとんど私と変わらない。

「・・・・・・」

私は黙々と走り続ける。途中で無視するのも可愛そつかなと思つた
けど・・・後ろを振り向いたら、
「いつものことだし」と言いながら、こを木の棒でつついていた。
可愛そから一気に危ないと思った私は加速して関わらないように
した。

朝練を終えて教室に入るといつも通り

「おは。チュー」と言う人がいる。その人の名前は網代

あじろひかる私は

無視をして向こうにいる友達に向かつていった。

「ええ・・挨拶もおはようのチューもなし！？」彼は悲しそうに今

いる教室から出ようとする。

「あのねえ、網代君。私は貴方にチューとかすると思つうーー。」

「だつてさあ、スキンシップとらないと須藤は俺のこと好きになつてくれないからーー。葵ちゃん以上に危ないとthought私はキツメに「私お兄ちゃんにはパンチしてるのでお兄ちゃん以下の貴方にキスするとか考えられない」と言つ。

さすがの網代君でもこれにはノックアウトだろ。」

ところが . . .

「そういうところがまた良いんじやん。俺を突き飛ばす感じ」
いけない。彼の言葉は吹雪なみに背筋に寒気を走らせた。もう駄目
だと思つた私は無視をして友達と話をしだす。

プロローグ 会流（前書き）

えつと、とうとう謎の一人が話します。（少しあなしたところで終
わりますが）

プロローグ③ 合流

放課後

俺はいつものように連れと帰る。あつ、そうだ。俺が水曜にのみ学校に行く理由を言つのを忘れてた。実は俺は年上が好みで、3年の葉月 里美先輩に恋をしてしまった。

なんでそれが水曜と関係あるかつて？それは . . .

「須藤ー。時間割り変わったぜー。」

「おう。すまんな」俺に時間割りを届けてくれた奴は俺が付き合いやすい五人の中の一人、斎藤 剛。ただ名前が似てるのが難点だ。

「そおいやあ、朝にお前の妹がつこを連れてたぞ。」

ハツ！？何をわけの分からぬことを？こいつ、エロ本読みすぎて頭がいつてしまつたか！？

「お前、エロ本見すぎただる。冗談やめとけつて」

「いや、ホントに見たんだつて」とうとう頭が壊れたらしに軽く脳震盪起こした方がなおるかなあ？

今日はたまたま部活がなくなつたので、私は早く家に帰つてテレビを見ようと思つて走つて帰つていた。

途中

「よお、茜ー」という声がしなかつたでもなかつたよつな気がするけど……。

「おー！実の兄貴をシカトですか！？俺ショック……」

ちつ、邪魔ものが。と思つたが仕方がなかつたので

「お兄ちゃん、ただいまの……」と言つて両腕を広げ、お兄ちゃんの方へ走つていつた。

「おお！ハグしてくれるのかあ」とわけの分からぬ発言をするお兄ちゃん。可愛そう……私の広げた腕はお兄ちゃんの前にラリオツトを決めた。

「ゴフツ？」そのまま逝つちやつても良かつたのにな。ほしー。

「あなた達が須藤剛に須藤茜ですか？」

私達に向かつて声がした。

「そうですけど、貴方達は？」見るからに怪しげな一人。やつは話しかけたのは女の方だろつ。男が太く座つた声でいつた

「俺らはお前らの過去を教えてやるつと思つて來ただけだ。」

プロローグ4 前半（前編）

茜と剛の過去（ちよつと違ひナビ）がこよこよ・楽しみにしないで
ください。

プロローグ4 前世

「私たちの過去って！？」

俺の妹がわけがない様な顔をして言った。分からぬのも無理は無いだろう、俺だって知らない。ただ、今までの記憶で不明なところはないから、生まれてからの話ではなさそうだ。

「で、教えるよ」俺の発言が意外だつたようで、男は少しだじろいだ。

「まあ、教えてやるよ。」女が話出す

「私達はある一家を探していた。手掛けは四人家族。でもそのうち二人はしんでしまつた。交通事故で」は？俺の家とおんなじじゃないか。俺が喋ろうとしたが、女は構わず話す。

「そのことが分からなかつた私達はその一家を探すのが困難になつた。しかし、偶然写真があり、その一人を見付けることが出来た。あなたはうすうす気付いてたよね。剛君。」何ですと！？俺が気付いてた？あいつらが来るのが？冗談じやない。夢だ。これは妹は硬直状態。ヤバイ。

「だからこうして話せることが私にとつてかなり嬉しい。ちょっと脇道にそれちゃつたから本題へ行きましょう。茜ちゃん、大丈夫？」
「う・うん・・・・・」大丈夫なわけないじやないか。あんな震えて・・・

「貴方たちの先祖は代々旅に出ている。しかも貴方たちの前世も須藤家に生まれている。貴方たちもそろそろ旅に出る時期なの。その旅ではあるものを探すの。それは光、闇、炎、水それぞれの球なんだけど、それには特殊な力が備わつてゐる。それを使って須藤家を大きくしていく必要がある・・・

「ちょっと待つて……」突然茜が口を開いた。

「その間みんなとあえないんでしょ？」確に、旅に出ぬといつ事は

みんなとわかれなければいけない。
だがまた会える . . .

「確かにそうね。貴方たちはまた会えると思つてゐるけど、今言つた

物列が方の、ついでに、おのれの記憶から貴方が、の存在が消えてしまう。それでも私は行つて欲しいんだけど、ちなみに私達は忘れないけどね。」う・・・みんなの記憶から消えちゃう、かあ。

嫌だな、そりやあ、

黙る
みんなと会えないのは御免だ

「アーティストの心」

女のその言葉を聞いて俺たちは思わず

「なんだって！？」と叫んでしまう。妹はハモつたことに不快

を感したら

「带动は口の悪いのがジラソの極悪者には感心の口はね。

٦١

そして

わかつた。俺はいくよ。妹が驚く。しかし女達はそういう事になることが分かつてゐるひじく、頷く。

「お前せどいあらうんだ?」男が聞く。

私は……」また決心がついていないようだ。

田中がおもむろに腰を下ろす。田中は、腰を下ろす度に、腰の筋肉が、筋肉の塊の如く、強烈な力感覚をもたらす。

二人は去っていった

プロローグ5 眼（前書き）

高校がちょっと忙しいので更新遅れます。すみません

プロローグ5 眼

「どうして彼等に眼の事を言わなかつたんです？」男の方が暗い空氣を割つて話始める。

「理由は特にないわ。ただ」女はそこまで言ひと喋るのをやめた。また沈黙

「お兄ちゃん、私はどうすればいい？」自分の部屋にいた茜はペンギンの縫いぐるみに向かつて話しかけていた。このペンギンの縫いぐるみは剛が茜の誕生日に貰つてやつた物だ。

私はみんなと離れたくない！でもお兄ちゃんはその思いのなか、行くことを決めた。どうやつたらその決意が

「わッ！…」

「キヤー！…」

「ちょうど、お兄ちゃん。部屋に入るときほノックしてつて言つてるでしょ？」

「したが、ノック。だけど反応無かつたから死んでると思つて入つた。」

そう、剛はノックを10回も繰り返したが反応が無かつたので心配したのだった。

「で、決めたか？」剛が重い口調で言った。

「……」黙る茜に剛は

「お兄ちゃんの言ひことば聞けつて……」

バッシーン……

剛のビンタが茜に当たる前に茜がビンタを剛にしたのだ。

「俺はショック……せつかく心配してやつてたのに……今にも泣きそうな剛に茜は言った。

「そんな頼りないお兄ちゃんだった、私が行かなきゃ心配でしょがら？」

俺はそんなに頼りないですか……そんなこと言わなくとも……

・まあ結果オーライかなあ？シクシク……そんなことを剛は思って分かった……」それだけ言つて部屋から出ていった。

「お待ちしていましたよ。」男と女の眼の前を剛と茜がいた。「で、どうするんです？」女が心配そうに茜に話しかけてる。「行くしかないでしょ。」

「まあ貴方が行かないと言つても行かせるつもりでしたがね。」男がそう言つたのを聞いて茜は自分で決意したことに安心した。

「昨日話忘れたことを言います。と言つてもわざとはなさなかつた

のですが . .

「何だ？」

「貴方たち兄妹はある特殊な眼を持つています。それは貴方たちしか開眼の方法を知らないのですが . . . その眼は血朱眼と言います。それは詳しいことは分からないので貴方方で調べてください。

それから . .

「それから？」

「私達は貴方方を忘れません。」

「「は？」」意味のわからない発言に剛と茜は思わずいつてしまつた。

「私達は . . . 」そうこつて女たちはフードをはずす。

第1話 旅立ち（前書き）

更新がかなり遅れました。ホントにすみません。これからもう少しこうことが続きますがよろしくお願いします。

第1話 旅立ち

女はフードを外した。
なんと、俺が好きだった里美先輩だった。

「先 . . . 輩？」

「ゴメンね、剛君。私だつて言わなくて . . . 」何で . . . 何で俺は
先輩だつて気付かなかつたんだよ

「そんなに気にしないで、」

「 . . . でも、俺は . . . 」

「正直、どうしていいのか分からない でも . . .

「じゃあ、行くわ」笑顔でこう言つしか、俺には出来ない . . . す

「ごく悔しい . . .

「いつてらつしゃい」笑顔で返すその言葉に涙が出そうになる . . .
行きたくなくなる でも行かなきや！

「よつ！」私より少し高めの男がフードをとつて言つた . . . 誰
？？知らないかおに私は戸惑つてしまつ
「まあ、分かんなくても無理はねえだろ」ニカツと笑つ

「男の子」に私は申し訳なかつた。実際、彼は私と同じ年なのだ。

「誰？」

「うーん。誰だろう？」適當な返事に私はいつもお兄ちゃんにするように自然とテニスラケットで殴るうとしてた。が、彼の言葉に手が止まつた。

「早乙女 阳ひやまなみで分かうねえか？」覚えている。幼稚園で初めて私が恋をした相手だつた。彼は純粹でかつ活発な男の子だつた。今もその面影を残して . . .

「いろいろ話したいけど、もう行かなきや」私は自分にいい聞かせながらそうつぶやいた。

「おう。頑張れよ」彼のあまりにも優しい言葉に私は涙をこぼす。

「準備ができたみたいだからせめてもの私たちの気持だと思つて受け取つて？」剛の学校にいる里美が綺麗な石を渡しながら言つた。

「これは？」

「お・ま・も・り」ここに」としたかおがまた可憐うしい。

「じゃあ行つてくる。俺たちがいない間よろしくな

「うん。気を付けてね」

「帰つたらいろいろな話をしようね」

「ああ、楽しみに待つてるから・・・」

こうして剛と茜が旅立つた。・・・・・

「結局あがつたな・・・お兄ちゃんの少し静かな声を聞くとまた涙を溢しやうになる。

「お前は帰つていいで」お兄ちゃん・・・いつものお兄ちゃんならやんなことを言わないのに・・・

「何で?」しばらくうつ向いていたお兄ちゃんが重い口を開いた

「お前に辛い思いさせたくないただそれだけだよ」

心配してくれるのはありがたいけど、私はもう決めたから・・・

「まあ深くは言わなによ

バシッ!!

気付いたら私はお兄ちゃんの頬を叩いていた。

「そんなこと言つたって似合わないんだから」そうこつて私は彼の懐で泣いていた。

ところでの石はまだひつゝ私のとお兄ちゃんのと色が違つ・・・もしかしたら・・・

「なー?」

お兄ちゃんの声で私は我を取り戻した。エッ?

例えようがない生き物が荒い息をたててこちらをにらみつけていた。

「もうかよ・・・」

「何?」

「話はあとだ」

そういうながら生き物に当たるとその生き物は焦げて灰になつていった。

バリバリバリ・・・

そういうながら生き物に向かつて走り出す。そして拳をつき出すと雷が手を覆つていた。

「あれが俺らの旅を邪魔するやつらだよ」やつらの兄ちゃんは笑つていた。

「俺のは黄色。お前のは?」

「・・・」

「私は白だった。何だらう?」

「分かんねえな何だらう?」

「上あらひなこで歩いへ。」

また歩く私たちまゝれからぬいひなるんだあひへ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1275d/>

血朱眼

2010年11月2日21時41分発行